

氏名	池谷 真梨子 Mariko IKEYA
所属	総合生活専攻 Graduate School of Human Ecology
学位の種類	博士 (家政学)
学位記番号	甲第9号
学位授与年月日	2016年3月18日
学位授与の条件	学位規則第4条1項該当
学位論文題目	保育所における乳幼児の手づかみ食べの発達過程およびその関連要因の分析 Development of Finger Feeding Behavior as Observed among Infants at a Nursery School and Analysis of Related Factors
論文審査委員	主査 湊 久美子 (和洋女子大学 教授) 副査 布施谷 節子 (和洋女子大学 教授)、中島 肇 (和洋女子大学 教授) 鈴木 みゆき (和洋女子大学 教授)、堤 ちはる (相模女子大学 教授)

## 要旨

近年、保育所に通う乳幼児が増加している。乳幼児期は「食を営む力」の基礎を培う時期であることから保育所での食事提供の意義は大きい。手づかみ食べは「授乳・離乳の支援ガイド」で重要性が示されているが、限られた分野での研究しか見当たらない。

そこで本研究では手づかみ食べに着目し、手づかみ食べの発達過程とその関連要因を検討することを目的とした。保育所に通う乳幼児10名を対象とした週2回(計133回)のビデオ観察調査と給食で提供されている料理の分析、対象児の母親へのインタビュー調査および東京都認可保育所1,627園の保育士への質問紙調査(有効回収率37.1%)により分析を行った。関連要因は、料理および母親の手づかみ食べに対する考え方と食事場面における乳幼児への介助とした。

手づかみ食べの発達過程について、手づかみ食べを最も多くする月を基点とすることで手づかみ食べは約2か月で急激に発達し、その直後1か月で食具食べへ移行したため手づかみ食べは減少する発達過程の特徴が明らかとなった。さらに、手づかみ食べは自分で食べる行動を促す食行動であることが示され、手づかみ食べが乳幼児の食行動の発達の上での重要性が示された。加えて手づかみ食べが最も多くみられた後期1か月の手づかみ食べはその直前の前期2か月より料理による影響が大きいことが示された。後期において主材料の肉類・調味料の酢・調理法の揚げる・食べ物の長さ・摂取率の項目で手づかみ食べをした料理としなかった料理の有意差が認められ、手づかみ食べに料理の大きさや乳幼児自身の嗜好が関連していることが示唆された。

一方、手づかみ食べの発達過程の類型と母親の手づかみ食べに対する考え方および食事場面における乳幼児への介助との関連性を検討した結果、手づかみ食べを多くしている乳幼児の母親は少ない児の母親に比べて手づかみ食べに積極的であり、乳幼児が主体的に食べる食環境を作っていた。これより、手づかみ食べの発達過程の違いの要因として、家庭での食事介助が示唆された。

本研究は保育士の乳幼児や保護者への対応および管理栄養士・栄養士を含めた調理従事者への情報提供への研究展開が期待できる。

## キーワード

保育所, 乳幼児, 手づかみ食べ, 食行動, ビデオ観察, 料理分析, 質的分析

## Abstract

This study focused on the development of finger feeding behavior, the importance of which is mentioned in the Guidance on Lactation and Weaning issued by the Ministry of Health, Labour and Welfare. The following related factors were also examined: cooked food factors, the mother's attitude to food and finger feeding, and assisting infants at meals. The study involved 10 infants at a nursery school. A video taken twice a week (133 sessions in total) of these infants was examined, analyses of cooked food elements, interview survey of mothers of infants and a questionnaire survey was administered to nurses at 1,627 nursery schools approved by the Metropolitan Government of Tokyo (valid responses were obtained from 37.1%).

It was found that this behavior develops quickly over a period of about two months before the month in which this

behavior becomes most prominent. Moreover, the study identified finger feeding as a behavior that helps the growth of self-feeding initiative.

Furthermore, it was found that the finger feeding behavior during the month in which it becomes most prominent is greatly influenced by what kind of food is given to them starting from the preceding two-month period, demonstrating the contribution of such factors as the sizes into which food is cut and the infant's likes and dislikes. In addition, the mothers of infants who exhibited finger feeding more actively were found to be more positive about finger feeding than the mothers of children who were less active in this regard, showing that assisted feeding of infants at home is a factor that influences the development of finger feeding.

### Key words

nursery school, infant, finger feeding, feeding behavior, video observation, cooked food analysis, qualitative analysis

## 第I章 緒言

我が国では、女性の就業状況の変化を背景とし、保育所に通う乳幼児が増加している。乳幼児期は食習慣の基礎を培う時期であることから、保育所における乳幼児への食事の提供は重要である。平成20年に改定された保育所保育指針において食育の推進が明記され、『保育所における食育は、健康な生活の基本としての「食を営む力」の育成に向け、その基礎を培うことを目標とする』と記されている。

乳幼児の食べる行動の発達過程は、養育者や保育士等に全て食べさせてもらう（以下、「全介助」とする）受動的な段階から、次第に自分で食べる能動的な行動へ変化する。この自分で食べる行動の第一段階が、自身の手指で食物を持ち口に運んで食べる（以下、「手づかみ食べ」とする）段階である。その後、スプーンなどの食具を用いて口まで食物を持って行って食べる（以下、「食具食べ」とする）第二段階の行動へと移行する。平成19年に厚生労働省より出された「授乳・離乳の支援ガイド」で初めて手づかみ食べについて提言され、手づかみ食べは摂食機能および自分で食べる機能の発達の2つの観点から重要性が示された。また、手づかみ食べはアメリカやイギリスの諸外国においても推奨されている。

このように手づかみ食べの重要性が示されているが、これまでの手づかみ食べに関する研究は臨床現場における食事指導を目的とした動作解析が中心であり、まだ狭い分野に限られている。

そこで本研究では手づかみ食べに着目し、保育所において乳幼児の手づかみ食べを促すために、まず手づかみ食べの発達過程を縦断研究により検討することとした。そして、手づかみ食べに関連する要因として、料理と養育者である母親の手づかみ食べに対する考え方と食事場面における乳幼児への介助について検討することを目的とした。

## 第II章 手づかみ食べの発達過程および類型

保育所において管理栄養士・栄養士・調理従事者（以下、栄養士等とする）が手づかみ食べの発達段階に応じた支援を行うためには、乳幼児の手づかみ食べの発達段階を把握することが重要である。そこで第II章では手づかみ食べの発達過程を詳細に検討することを目的とした。対象は、9～24か月齢の乳幼児10名（A～Jとした）とし、週2回の保育所での昼食時のビデオ観察による縦断的研究（計133回）を行った。分析項目は、①全介助、②手づかみ食べ、③食具食べとし、以下、手づかみ食べと食具食べを合わせて「自食」とした。そして、各行動の起こった回数を分析時間で除し、その行動の1分あたりの生起頻度（回/分）を示した。さらに、自食の発達過程において各行動の関係性に変化が生じた時点の月齢と生起頻度を抽出し、手づかみ食べと食具食べの変化ポイントとした。以下、データはすべて平均値±標準偏差で示す。

図1に対象児の食べる行動の月齢推移を示した。手づかみ食べ開始月齢は平均 $12.8 \pm 2.1$ か月であった。食具食べが開始した月齢は平均 $16.3 \pm 1.6$ か月であった。自食が全介助を上回った月齢は平均 $16.6 \pm 2.3$ か月であった。そして、手づかみ食べ開始から食具食べ開始までは平均 $3.7 \pm 2.1$ か月を要し、食具食べが手づかみ食べを上回った月齢は平均 $18.6 \pm 1.7$ か月であった。次に、手づかみ食べが最も多くみられた月（平均 $16.5 \pm 2.0$ か月）を「基点：0月」とした場合、手づかみ食べは約2か月で急激に発達し、手づかみ食べが最も多くみられた直後1か月で食具食べが発達した（図2）。

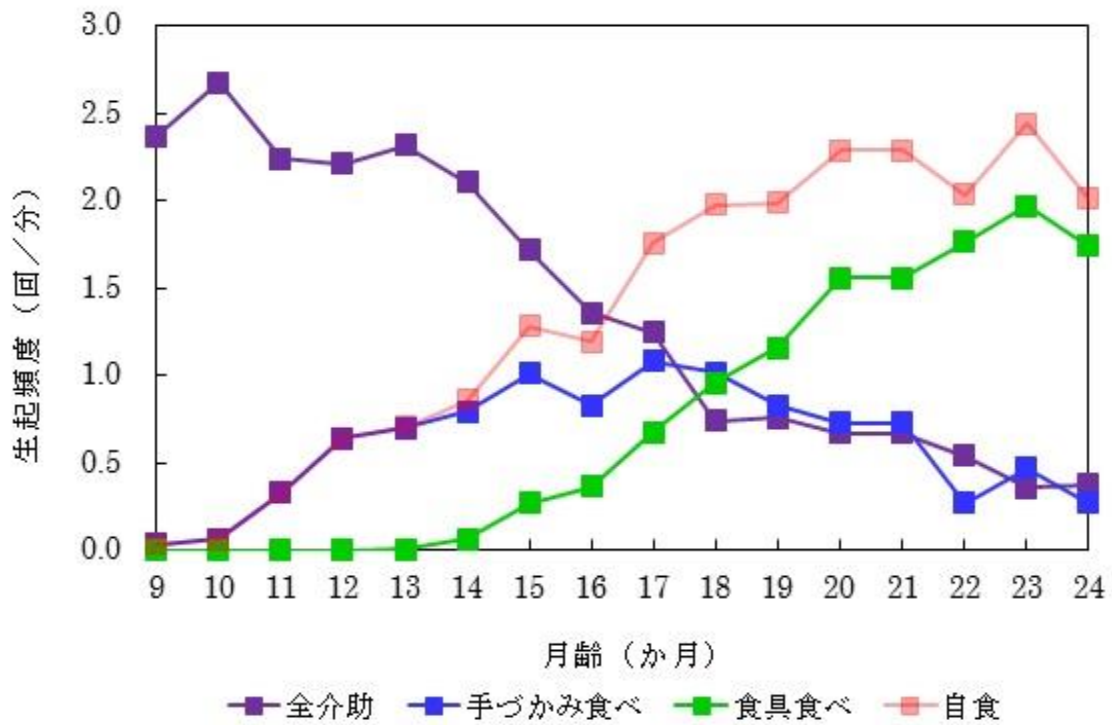


図1 対象児の食べる行動の月齢推移 (平均値)

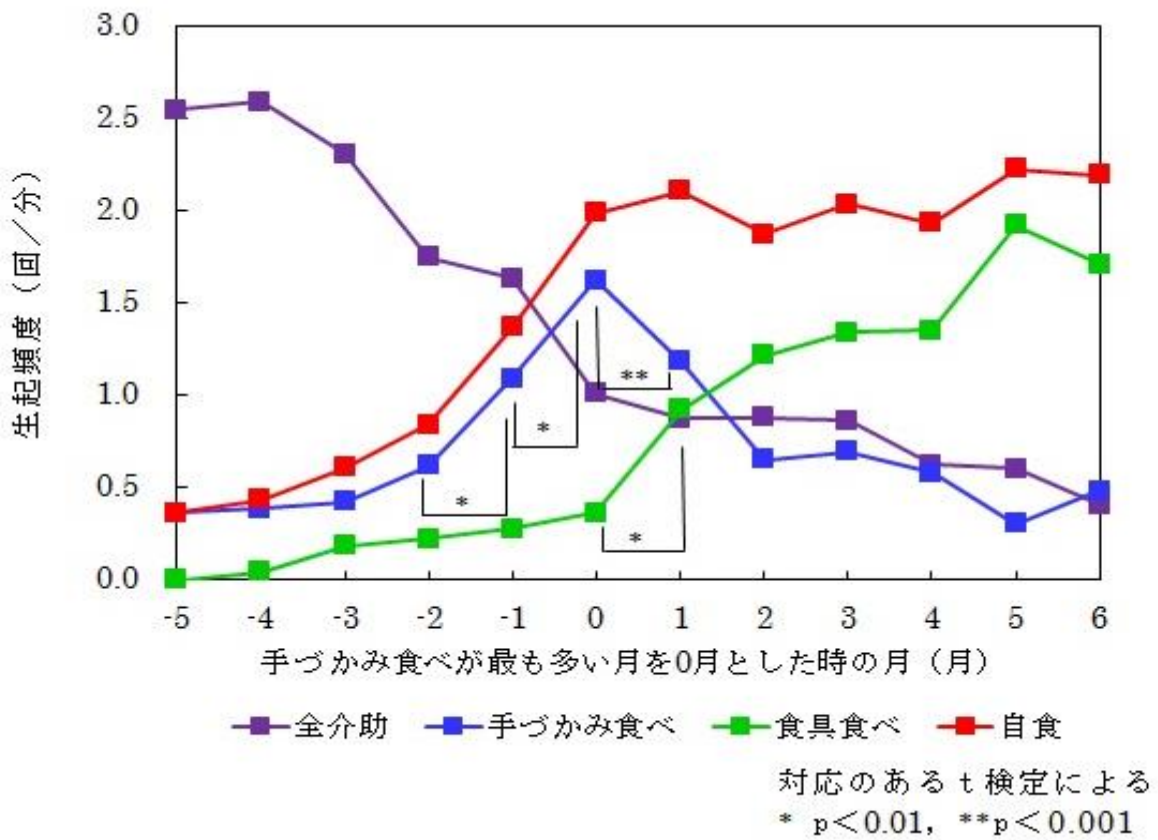


図2 手づかみ食べが最も多い月を「0月」とした時の食べる行動の発達過程

次に手づかみ食への発達過程の類型を検討するため、手づかみ食の変化ポイントを用いて主成分分析を行った(表1)。対象児のうち、観察開始時にCのみ手づかみ食が開始されていたため、Cは除いた。第一主成分は「手づかみ食への生起頻度」、第二主成分は「手づかみ食への発達月齢」、第三主成分は「手づかみ食への発達に要する月数」と解釈した。第二主成分までの累積寄与率が71.5%であったので、第二主成分までの主成分得点を算出し、対象児の手づかみ食への発達過程の類型を図3に示した。手づかみ食への発達過程には3つの類型が示された。パターンⅠは手づかみ食を多くしている特徴がみられ、H・I・Jが該当した。パターンⅡは、手づかみ食への発達月齢が高い特徴があり、A・B・D・E・Gが該当した。パターンⅢは手づかみ食への発達月齢は早い、手づかみ食は少なく、Fが該当した。

表 1 主成分分析結果

	第一主成分	第二主成分	第三主成分
自食が全介助を上回った月齢の手づかみ食生起頻度	.970	.064	-.099
手づかみ食生起頻度平均	.940	-.043	-.170
自食が全介助を上回った月齢	-.926	-.111	.019
自食が全介助を上回った月齢時の自食の生起頻度	.877	-.103	-.079
1か月間における手づかみ食最大変化量	.699	.491	.006
手づかみ開始月齢	-.618	.560	-.403
1か月間で手づかみ食生起頻度が最も増加した月齢	-.435	.771	-.015
手づかみ食開始から自食が全介助を上回る月齢までの月数	-.465	-.728	.450
手づかみ食最高頻度月齢	-.137	.707	.595
手づかみ食開始から手づかみ食最高頻度月齢までの月数	.418	.150	.892
固有値	4.92	2.23	1.56
寄与率	49.2	22.3	15.6
累積寄与率	49.2	71.5	87.1

因子抽出法：主成分分析  
回転なし

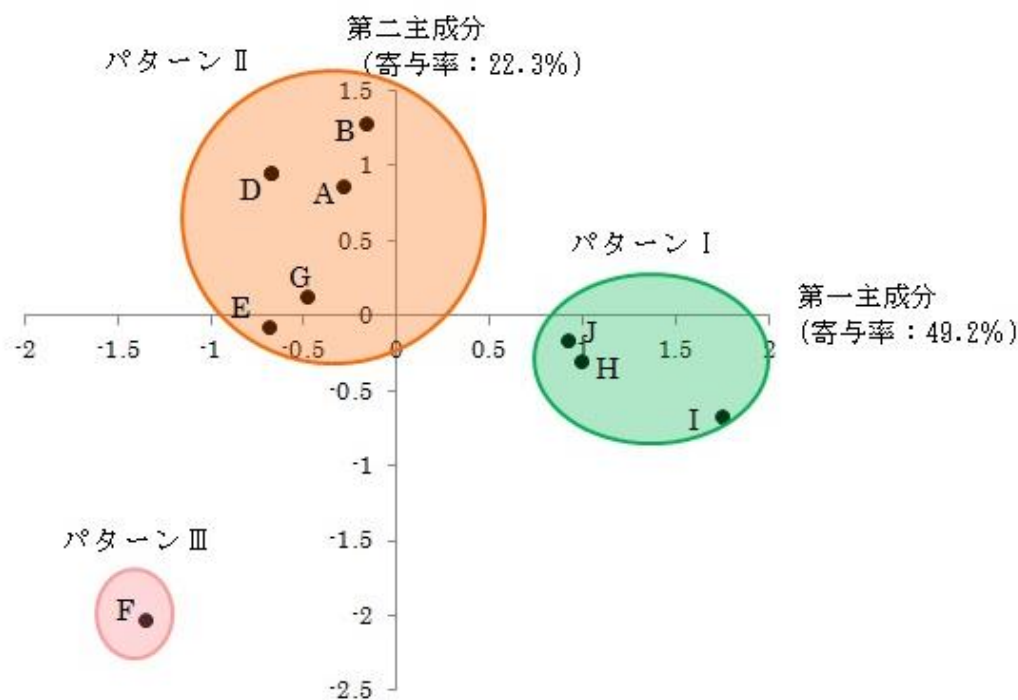


図 3 対象児の手づかみ食への発達過程の類型

自食の発達過程における関連性を分析した結果 (表 2), 手づかみ食べを多くしているほど, 食具食べを中心とした月齢において自食の頻度が高かった。

表 2 自食の発達過程における関連性

変換ポイント	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	
手づかみ食べ	①手づかみ食べ開始月齢	1	.372	-.540	-.544	.513	-.119	.619	-.312	-.489	-.415	.400	<b>-.714*</b>	.374	-.197	-.539
	②手づかみ食べ最高月齢		1	.581	-.254	.371	.418	.161	-.212	-.070	.050	.034	-.296	.627	-.149	-.577
	③手づかみ食べ開始から手づかみ食べ最高月齢までの月数			1	.247	-.124	.427	-.406	.081	-.318	.275	-.252	.358	.427	-.393	-.031
	④手づかみ食べ生起頻度平均				1	-.309	.402	<b>-.888**</b>	-.498	<b>.901**</b>	<b>.802**</b>	-.091	.485	.035	<b>.729*</b>	.615
	⑤1か月間で手づかみ食べ生起頻度が最も増加した月齢					1	.319	.083	-.450	-.294	-.435	.627	.000	<b>.914**</b>	-.057	.109
	⑥1か月間における手づかみ食べ最大変化量						1	-.445	-.508	-.608	.500	.140	-.347	.545	.561	.040
	⑦自食が全介助を上回った月齢							1	.553	<b>-.886**</b>	-.553	.088	-.548	-.181	<b>-.806**</b>	-.560
	⑧手づかみ食べ開始から自食が全介助を上回る月齢までの月数								1	-.527	-.394	-.292	.095	-.579	<b>-.888*</b>	-.184
	⑨自食が全介助を上回った月齢の手づかみ食べ生起頻度									1	<b>.822**</b>	-.137	.428	.101	<b>.816**</b>	.366
	⑩自食が全介助を上回った月齢時の自食の生起頻度										1	-.476	.111	-.162	<b>.777*</b>	-.108
食具食べ	⑪食具食べ開始月齢										1	.357	<b>.742*</b>	-.240	.572	
	⑫手づかみ食べ開始から食具食べ開始までの月数											1	.271	-.052	<b>.891**</b>	
	⑬食具食べが手づかみ食べを上回った月齢												1	.214	.274	
	⑭食具食べが手づかみ食べを上回った月齢時の自食率													1	.040	
	⑮手づかみ食べ最高月齢から食具食べが手づかみ食べを上回るまでの月数															1

Pearsonの相関係数による

\*p<0.05, \*\*p<0.01

### 第三章 手づかみ食べに関連する料理要因の分析

保育所において栄養士等が手づかみ食べの発達段階に応じた料理を提供するために, 手づかみ食べをする料理の特徴を検討することを目的とした。第II章で示した「-2月」~「0月」を手づかみ食べ発達時期とし, さらに「-2月」と「-1月」を手づかみ食べ前期, 「0月」を手づかみ食べ後期とした。対象児は第II章と同様の10名であり, 各児の手づかみ食べ発達時期における主食・主菜・副菜・汁物の4つの料理区分別手づかみ食べ頻度 (%) を算出した。手づかみ食べ頻度は, 手づかみ食べの口数を全介助・手づかみ食べ・食具食べの総口数で除し算出した。そして, 手づかみ食べ前期と後期で手づかみ食べをする料理と手づかみ食べをしない料理の特徴および摂取率の差異について分析した。料理のもつ要素として, ①主材料, ②調味料, ③調理法, ④長さ, ⑤硬さとした。また, 手づかみ食べに関連する手指の機能の発達段階がそろっていることをK式発達検査で確認した。

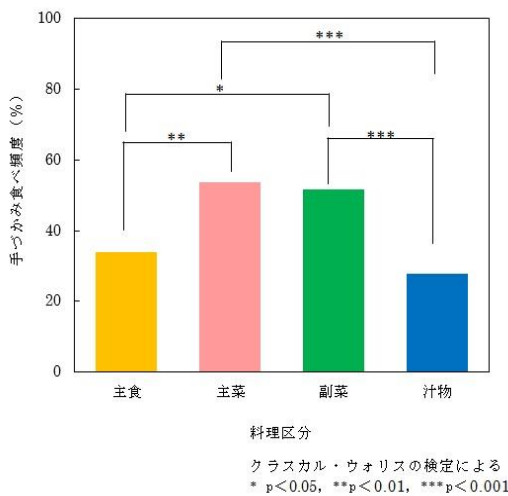


図 4 料理区分別手づかみ食べ頻度

手づかみ食べ発達時期の手づかみ食べ頻度は 52.8 ± 43.5% であった。料理区分別では, 主菜で手づかみ食べ頻度が最も高く 53.7% で, 次に副菜が 51.6%, 主食 33.8%, 汁物 27.9% であった。主菜と副菜が主食と汁物より手づかみ食べ頻度が有意に高かったことから (図 4), 主菜と副菜について分析を行った。

図 5・図 6 に手づかみ食べ前期・後期において, 手づかみ食べをした料理としなかった料理の差異を示した。手づかみ食べ前期で手づかみ食べをした料理としなかった料理で有意差がみられた項目は長さのみであった。それに対し, 後期では主材料の肉・調味料の酢の使用, 調理法の揚げる, 長さ, 摂取率の 5 項目であった。これより, 後期の手づかみ食べは, 前期に比べて食べ物の特徴および乳幼児自身の嗜好との関連があることが示唆された。

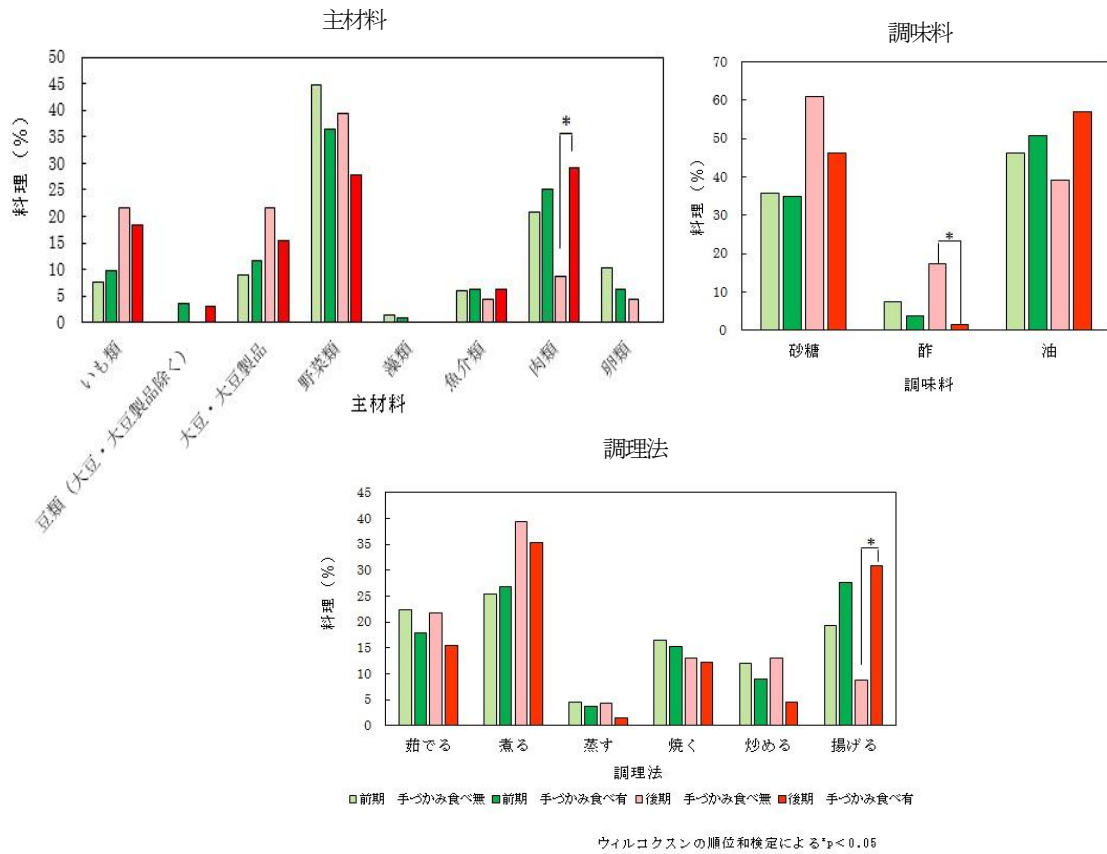


図 5 手づかみ食べの発達時期の違いによる手づかみ食べをした料理としない料理の差異 (主材料・調味料・調理法)

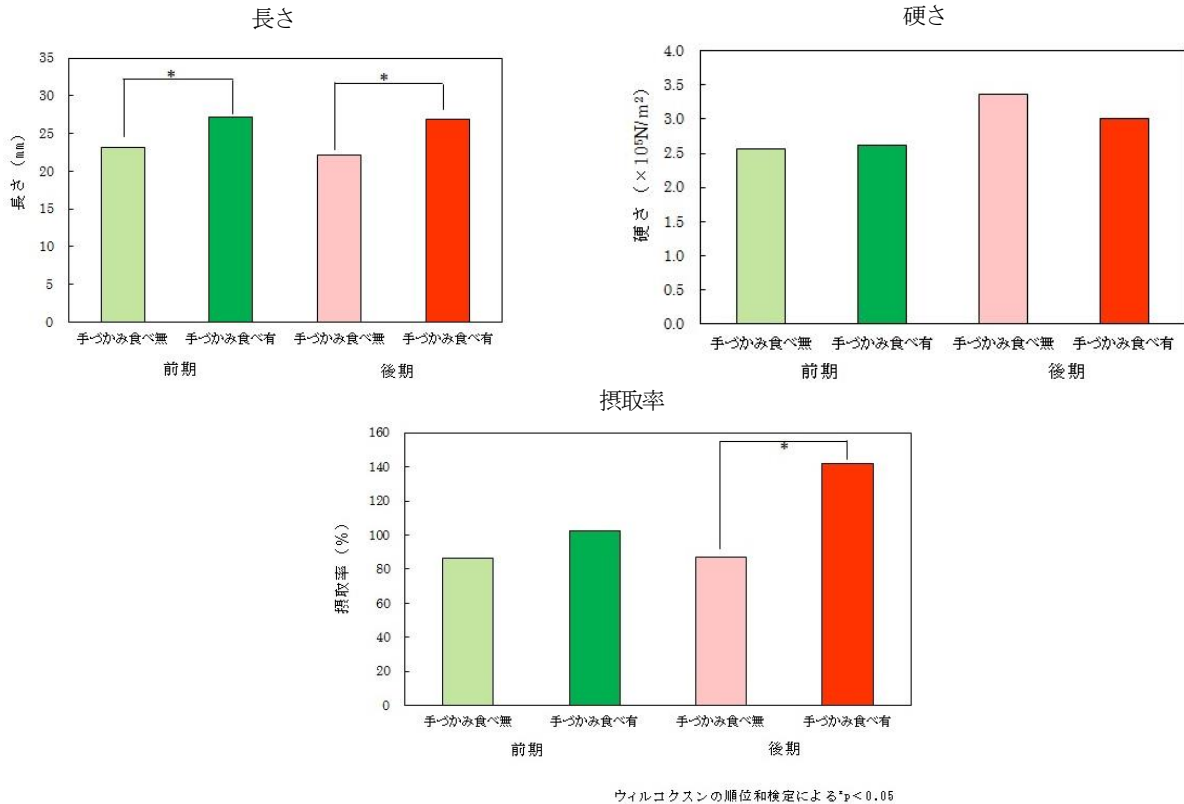


図 6 手づかみ食べの発達時期の違いによる手づかみ食べをした料理としない料理の差異 (長さ・硬さ・摂取率)



#### 第IV章 手づかみ食べの発達過程の類型と母親の手づかみ食べに対する考え方と食事場面における乳幼児への介助との関連

第IV章では、第II章で示した手づかみ食べの発達過程の類型と母親の手づかみ食べに対する考え方と食事場面における乳幼児への介助との関連を検討することを目的とした。

母親の手づかみ食べに対する考え方と食事場面における乳幼児への介助について聞くため、対象児A～Jの母親のうち協力の得られた8名（C、Dを除く）の母親に約30分程度のインタビュー調査を行った。

手づかみ食べに対する考え方として【積極的】【子どもの気持ちを尊重して受容】【消極的】の3つのカテゴリが認められた。【積極的】な母親は、パターンIの2名であり、【子どもの気持ちを尊重して受容】している母親は、パターンIの1名、パターンIIの1名であった。【消極的】な母親は、パターンIIの3名、パターンIIIの1名であった（表3）。

表3 母親の手づかみ食べに対する考え方についての語り

カテゴリ	サブカテゴリ	語り例
積極的	手づかみ食べの重要性を認識	・（汚れるのは）ストレスですね。嫌だけど、それだからやめさせようとかは全く思っただけです。絶対にそういう（汚れるという）理由でやらせないようにするのはやめようと思っただけだったので、全く気にせずに汚したら汚したで、こぼれちゃったねと言いながらやらせてました。きっかけは、兄に子どもがいるんですけど、その子がまさに真逆で、お母さんが全部あげて、汚したらすぐ拭いてっていう感じの子育てをしていて、なかなか自分で食べられなかったんですよ。幼稚園上がっても食べさせてもらうくらいの遅さだったので。母がそれをずっと心配していて、なるべく自分がやりたいと思ったことはやらせたりした方がいいし、食べたいものも自分で好きなように食べさせてあげた方がいいっていうのを言われましたね。（H）
		・あまり汚いということを気にせずにやっていたですね。手づかみ食べをさせた方がいいっていうことは聞いたことがあったので、できるだけ止めずにやらせてましたね。保育園で聞いたのかもかもしれませんね。一人目の時とかに。（I）
子どもの気持ちを尊重して受容	汚れても仕方ない	・あ〜、しょうがないかなって。話には聞いてたから、そんなもんかって言って、必死に触られる前とかに拭いてたりとかはしてたんですけど、この辺は（子どものまわり）もういっかみしたいな。（E）
		・こぼしたらわりとすぐ拭くとか、その手で椅子とか服とか色んなものを触るので、わりとこまめに手は拭いたりはしてましたけど、汚すからといってすぐ片付けたりとかはしなかったです。片付ければいいんだみたいな、私が見たいな。（1人目より）わりと大らかに見守れてる方かなと思いますね。（J）
消極的	汚れが気になる	・私はほんと単純に家が汚れるのが嫌だという理由で、なるべく油ものが色んなところにいかないとか、なるべく逆に控えちゃってましたね。手づかみにして欲しくないと思っちゃってたかもしれないです。（A）
		・保育園で先生とかにも、今日うどんやってみたら本人一生懸命やって、だいぶこぼしたけど全部食べましたよっていうのを言われて、ああそうなのかって思いながら、とはいえ、家ではあんまり汚れるのもと思って。手づかみ食べがいいというのはよく聞いていたけど、やっぱり家だとするとグチャグチャになるのはヤダなと正直なところあって。（B）
	時間的余裕がない	・育休中は汚したければどぞどぞって、どんどんどぞって感じだったんですけど、やっぱり余裕がなくなりますね。時間もないので。（F） ・わりと朝にお風呂入ってシャワー浴びさせて、着替えさせて食事するから、着替えがちょっと無理っていうことがあって。（G）
遊び食べにつながることへの嫌悪感		・いつも全部投げたりクチャクチャするから、なるべくそんなにクチャクチャしないものとかを選んでたんで。（A）
		・こぼしながら食べる分には許せるんですけど、テーブルに落として手で遊び始めると許せないんで、取り上げます。（G）

食事場面における乳幼児への介助は、【子ども主体で食べる】と【母親の介助が多い】の2つのカテゴリが認められた。【子ども主体で食べる】ようにしている母親は、パターンIの3名、パターンIIの1名であった。【母親の介助が多い】と答えた母親は、パターンIIの3名、パターンIIIの1名であった（表4）。

表 4 母親の食事場面における乳幼児への介助について

カテゴリ-	サブカテゴリ-	語り例
子ども主体で食べる	子どもが自分で食べたい気持ちを尊重	・自分で食べて全然食べなくて、量が残ったら食べさせます。一人で食べる時は全然放っておきます。私は私のご飯を食べて、この子は自分で食べてからいいやと思って、のぞいてみたらいっぱいあって何もしてなかったり、チラッと見たときに取れてない、すくえてないとかで、全然進んでないと手伝ってあげたりとか。(E)
		・基本的に自分でやりたがったら、全部やらせるようにしてたので、確かに本人がやりたがって。一人でだいたい一通り食べ終わらせた後に、もうちょっといけるかなと思ったら、残ったものを食べさせたりしています。(H)
		・手づかみ食べをしている時から、手についたぞみみたいな感じで見せてきたりして、今拭いてもしょうがないでしょって言って、またつけてやるんですけど。食べたい、食べたいで自分でどんどん勝手に食べちゃってという感じですね。上の子の時は上手くできないことはやってあげたりとか、1対1だったので（食べさせて）あげたと思うんですけど、今はできるだけ任せたいという感じです。あんまり下の子ばかりに何でもかんでもやってあげると上の子がいい気持ちがないとかもある。(I)
		・自分でやりたいですね。見守るか、アシストするかどっちかです。(J)
母親の介助が多い	子どもが手が汚れることを嫌がる	・手が汚れたから嫌だって言って食べなくて、あたしがちょこちょこ食べさせてますけど、今も手が汚れるのがすごい嫌いみたいで、手づかみで食べるということはあるまりしないですね。(A)
	子どもが自分で食べたがらない	・あたしが食べさせてしまうのがいけないのか、自分でそんなに手づかみをしようとしないうし、そんなにやらせてやらせてという感じでもない。(F)
	子どもに食物で遊ばせないため	・家ではあんまり（手づかみ食べるの時期は）なかったですね。今でも自分で最初は食べるんですけど、途中でだんだん飽きてくるので、あたしに食べさせるみたいになったり、あとあたしもあんまり時間かかっちゃうと飽きちゃうかなと思うんで、合間合間であげたりとかしているんで、そうするとあんまり手づかみしている暇がなかったりするのかな。(B)
	子どもに食物で遊ばせないため	・基本8割がた（食べさせている）。水でも牛乳でも、最初は自分で飲んでですけど、ちょっとこぼれたら遊び出して牛乳をもっと出したくなっちゃうりとか、そういうのがあるからついつい牛乳も持ってあげるとかそういうことが多い、遊ばせないために。(G)

以上より、手づかみ食べの生起頻度が高く、早期に自食を習得していた特徴を持つ対象児（パターンⅠ）の母親は、手づかみ食べに対して積極的な者が多く、対象児が主体的に食べる環境を作っていた。それに対し、手づかみ食べの生起頻度が低く自食の習得が遅い対象児（パターンⅡ・Ⅲ）の母親は手づかみ食べに消極的であり、食事場面での介助が多く、手づかみ食べの発達過程の類型と母親の手づかみ食べに対する考え方と食事場面における母親の乳幼児に対する介助に関連がみられた。

## 第Ⅴ章 保育士からみた手づかみ食べの意義と手づかみ食べの関連要因

第Ⅴ章では、第Ⅱ章で示した手づかみ食べの意義、第Ⅲ章の手づかみ食べに関連する料理要因、第Ⅳ章の手づかみ食べの発達過程と養育者の食事場面における乳幼児への介助との関連について、多くの乳幼児を見ている保育士の視点から検討することを目的とした。東京都認可保育所のうち0歳児保育を行っている1,627園を対象とした質問紙調査を行った。回答者は、0歳児クラスを担当したことのある保育士のうち、経験年数の最も長い者とした。

手づかみ食べに対する積極性についての回答は、「とても積極的にしている」62.8%、「やや積極的にしている」31.7%、「あまり積極的にしていない」4.8%、「まったくしていない」0.7%であり、96.5%の保育士が手づかみ食べに積極的であった。手づかみ食べを積極的にする理由として最も多かった回答が「食べる意欲を育てるため」が69.1%で、次いで「園児の自分でやりたい気持ちを受容する」が24.2%であった。

手づかみ食べを「とても積極的にしている」と回答した保育士を積極的群、「あまり積極的にしていない」「まったくしていない」と回答した保育士を消極的群としたところ、積極的群は消極的群より、手づかみ食べの頻度により園児の違いが「非常に高い」と感じていた割合が高く、有意な差がみられた。また、その園児の手づかみ食べ頻度の違いの要因として最も多かった回答は「園児の食への興味」で88.8%、「家での食べさせ方」65.0%であった。さらに、手づかみ食べを多くしている児のその後の特徴として「食に対して意欲的である」が94.0%と最も高く、次いで「自分で食べたがる」が79.7%であった。さらに、手づかみ食べをする料理に特徴が「ある」と回答した者は84.7%であった。その特徴として最も多かった回答が「大きさ」74.7%、次いで「形」68.0%、「かたさ」54.3%、「好きなもの」50.5%であった。

以上より、保育士からみて、手づかみ食べを多くしている園児は、その後、食に対して意欲的であり、第



II章の手づかみ食べを多くすることで自食が促されていたという結果と同様であった。そして、手づかみ食べに関連する料理要因として、料理の形状や乳幼児自身の嗜好があげられ、第三章の手づかみ食べに関連する料理の特徴として示された長さやよく食べるものと一致した。さらに、手づかみ食べに積極的な保育士ほど、手づかみ食べの頻度の違いによる園児の違いを感じており、その要因として最も多かった回答は、園児の食への興味であり、次いで家で食べさせ方であった。この結果は、第四章の乳幼児の手づかみ食べには、母親の手づかみ食べに対する考え方と乳幼児への食事場面における介助が影響するという結果と一致した。

## 第VI章 総合考察

本研究は、保育所において乳幼児の手づかみ食べを促すための支援について検討するために、手づかみ食べの発達過程および手づかみ食べの関連要因を明らかにした。手づかみ食べに関連する要因として料理および母親の手づかみ食べに対する考え方と食事場面における乳幼児の介助とした。

保育所における乳幼児の手づかみ食べに対する支援としては、第一に、保育所の職員全員が手づかみ食べの重要性を認識することが重要であると考え。手づかみ食べの重要性については、本研究で手づかみ食べは自分で食べる行動の発達の上で重要であることを示した。第二に、保育所内における乳幼児への支援である。本研究で手づかみ食べは約2か月で急激に発達し、その直後1か月で食具食べが発達したことを示した。これは、保育士が乳幼児一人一人の手づかみ食べの発達段階を把握するときの情報として役立つと考える。そして、保育士は乳幼児の手づかみ食べの発達段階を栄養士等に伝える必要がある。本研究で手づかみ食べには料理の大きさや乳幼児自身の嗜好が明らかとなったことから、栄養士等は保育士から聞いた乳幼児の手づかみ食べの発達段階に合った料理を提供することが可能であると考え。第三に、保育所から家庭への支援である。本研究で手づかみ食べには養育者の考え方や関わりが影響し、手づかみ食べを促すためには乳幼児が主体的に食べる環境を作る必要があるとことが示されたことから、保育所から家庭への支援として手づかみ食べの重要性と乳幼児が主体的に食べる環境を作るように伝えることが重要であると考えた。

これらの支援を行うことにより、乳幼児が手づかみ食べを多くし、自分で食べる行動が促されると考える。

## 第VII章 結論

1. 手づかみ食べの発達過程について
  - 1) 手づかみ食べは約2か月で急激に発達し、手づかみ食べが最も多くみられた直後1か月で食具食べへと移行するという発達過程が示された。
  - 2) 手づかみ食べを多くしている乳幼児は、その後の自分で食べる頻度が高く、手づかみ食べは自分で食べる行動を促す行動であることが示された。
2. 手づかみ食べの関連要因について
  - 1) 手づかみ食べが最も多くみられた1か月間における手づかみ食べは、その直前の2か月間と比較して料理による影響が大きいことが示された。
  - 2) 手づかみ食べには料理の大きさや乳幼児自身の嗜好が関連することが示された。
  - 3) 手づかみ食べの発達過程には家庭での食べさせ方が関連することが示された。

## 本論文に関する業績（有審査原著論文）

- 1) IKEYA M, YANAGISAWA Y, Analyses of Cooked Food Factors Relating to Finger feeding by Infants, *Journal of Home Economics of Japan*, 67(2), 55-65, 2016.
- 2) 池谷真梨子, 柳沢幸江, 乳幼児の手づかみ食べの発達過程および類型, *小児保健研究*, 74 (6), 884-895, 2015.
- 3) 池谷真梨子, 柳沢幸江, 園児の摂食機能獲得を目指した保育所栄養士等の取組みに関する研究, *栄養学雑誌*, 71 (5), 275-281, 2013.
- 4) 池谷真梨子, 柳沢幸江, 全国保育所における園児の摂食に関する実態調査, *栄養学雑誌*, 71 (3), 155-162, 2013.